

# 鶴見文化財学会報

## Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.7

2006年3月24日発行  
鶴見大学文化財学会

### 「文化財学」と日常生活

河野 真知郎

授業中に先生が、「こんな当たり前の事も知らないの、近頃の学生は困ったものだ」と嘆く場面に遭遇した者はけっこういるだろう。だからと言って、「さあ、これから真面目に勉強するぞ」とファイティングポーズをとると、ドッと疲れに見舞われることでしょう。何事によらず「勉強」というのはつらいイメージがつきまとう。そこで、「文化財学」にお気楽にアプローチするコツをお教えしようというのが本稿の趣旨。

文化財とは過去の人々が作り、使い、伝えてきたものだから、今の我々の身のまわりのものはきっと未来には文化財になると思えば良い。すると日々使っているものに対し興味を深めることが、文化財学の第一歩になる。そしてそのものの起源や時代による変化を知ることが立派な学習といえるし、そのものをどうやったら壊さず汚さずに明日以降に伝えられるかは、文化財の保存問題のトレーニングになる。

例えば音楽が好きという人ならば、楽器や音階や歌詞などに理解が深いはず。ロックやラップ系ばかりでなく、沖縄石垣島出身のピギンの曲を聴けば、サンシンやウチナーグチについて知りたくなるだろうし、兄弟で津軽三味線を弾くのを聴けば、民俗芸能がどういった人々によってになわれ、どういう社会の中で伝えられてきたかに目が向く。鼓童の迫力ある和太鼓を聴けば、神事や仏事における太鼓の役割りにも想いはつらなる。

むづかしい歴史の本を読む前に、江戸の生

活を題材とした落語を聴くのも手ではないか。「芝浜」のような教訓的なものも良いが、「王子の狐」や「たぬさい」のようなバカバカしい話の中にも、今日「有形民俗文化財」とされるものがいくらか出てくる。かといって廊下のにめり込むのはいささか問題はあるが、それでも吉本のおわらいよりは学術的な気分にはたれる。

美術が好きで美術館を訪れる趣味を持っているならば、それは頼もしいことである。当然、作家の生涯や時代背景を知ることがはしているだろうから。また画材が「キャンバス、油彩」であるか否かも知っていよう。できたら、ある絵の前に立ったとき、絵のかけられている高さ、隣の作品との間隔、照明がどのように当てられているかなどにも注意を払ってほしい。将来皆さんがなりたがっている学芸員の技がそこに隠されているからだ。

誰もが持っているケータイ。落として壊れてしまった経験をもつ人も多いだろう。その「壊れる」という事象の原因について考えてみたらどうだろうか。衝撃による液晶画面の破損、あるいは内部での断線、トイレの水面に落下となれば基盤配線のショートなどが考えられよう。もしそのケータイが「文化財」であったならば、この壊れるという事態に陥らないようにするのが保存法の基礎になるではないか。

ややこじつけ的な話であるが、文化財学をきわめるにはまず日常生活から、ということでもあります。

## 「さらさ」の輸入

石田 千 尋

異国的な花鳥・人物・幾何学文様等、種々様々な模様を色鮮やかに主として木綿布に染めたものを、今日、私たちは「さらさ」と呼んでいる。「さらさ」の発祥地についてははっきりしていないが、今日最も古い染色の歴史をもつインドに求められている。また、「さらさ」の語源についても、西インドの地名スラット Surat からきているとする説、ポルトガル語の Saraça, Sarasa 説、スペイン語の Saraza 説、ジャワ語の Srash 説、インドのグジャラットの土語 Sarasa 説等、従来からさまざまな説がとかれているが、いまだ確証がえられていない。

「さらさ」が何時、誰によって日本に持ち渡られたかも決め難い。しかし、16世紀後半には、ポルトガル・スペインもしくは琉球・中国等の船で輸入されていたといわれる。16世紀から17世紀にかけてヨーロッパからポルトガル・スペイン・オランダ・イギリスが相次いで日本に来航し、その舶載品の中に異国情緒豊かな「さらさ」が含まれていたことは容易に推測される。当時、「さらさ」は日本で好奇の眼をもって迎えられ珍重されたに違いない。今のところ「さらさ」に関する最古の記録といわれる慶長18年（1613）のイギリス人ジョン・セリスの日本渡航記に、当時の平戸の領主等に対して、pintados pisgars すなわち、更紗ピスガルを贈物にしたという記事がみられ、「さらさ」が贈答品として使用されていたことがわかる。

日本に輸入された「さらさ」はさまざまなものに使用された。江戸時代初期には、陣羽織や小袖、帯、茶道具、祇園祭の装飾品などに珍重された。しかし、中後期になると、風

呂敷や煙草入れなどの袋物や下着（図1）や襦袢・着物の裏など実用的な方面にも用いられた。『守貞漫稿』に「文政天保の頃来舶の華印布俗に廣更紗と云物價廉也、故に三都ともに男女晴服略服の時の下着に専之し」とあるように文政・天保期頃になると「さらさ」も廉価なものとして一般にも用いられていたようである。

日本に輸入されて、「さらさ」は紗羅紗・佐羅佐・佐羅左・佐良左・沙羅沙・皿紗・更紗と表記され、紗羅染（しゃむろぞめ）・花布（かふ）・印花布（いんかふ）とも呼ばれた。また、特に金箔・金泥を施したものを金華布・金ザラサ・金入さらさ等ともいっている。「さらさ」の到来は近世の友禅染をはじめとする日本の模様染の発達に多大な影響を与えた。また、日本において「さらさ」そのものの模倣もおこなわれた。今日よく知られている鍋島更紗をはじめとして、京更紗、堺更紗・長崎更紗・天草更紗等、インド更紗の模造といえる和更紗が製作されたのである。

この16世紀から日本に輸入され、珍重・実用化され、模造までつくられた「さらさ」は、19世紀になると、その輸入が、インド産からヨーロッパ産へと代わっていく。その背後には当時の国際情勢が影響しているのはもちろんであるが、現存するさらさ裂（図2）を見ると、質の低下したインドさらさに比べ、ヨーロッパさらさの高品質と色鮮やかなプリントに、「鎖国」下の日本人が、今までとは違ったエキゾチシズムをそこに感じていたからこそその輸入を求めたことが伝わってくる。

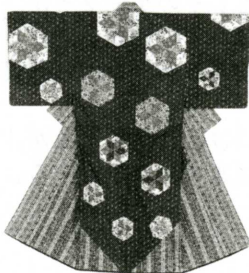


図1 亀甲に六稜星文縫合更紗下着  
(神戸市立博物館所蔵)



図2 嘉永七年 寅阿蘭陀舟本方品代切本帳  
(長崎歴史文化博物館所蔵)

## 文化財学会 春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉

「薩摩琵琶で語る平家物語の世界」

報告 2年 松井ゆかり

平成17年度鶴見大学文化財学会春季講演会は、『薩摩琵琶で語る平家物語の世界』と題し、薩摩琵琶晴風会会長の山下晴楓先生をお招きして、6月4日土曜日大会館にて開催されました。

はじめに、本大学教授の関幸彦先生より山下先生のご経歴及びこれより演奏される曲に関連する『平家物語』についてのお話がありました。その後、山下先生が壇上へ登られ、一曲目、『実盛』を御演奏いただきました。『実盛』は、老齢の身を隠して戦へ赴き、敵陣の中であって最期まで名を名乗らなかった武士齋藤別当実盛と、木曾義仲側の武士手塚光盛との組討ちの場面を琵琶歌として歌ったものです。

ご演奏後、事前に配布された資料に基づいて琵琶全体の歴史とその変遷、薩摩琵琶本体の製作過程、薩摩琵琶の奏法とその由来、琵琶のおかれている状況をお話いただきました。そして、当日山下先生よりご用意いただいた音源を会場に流しながら、平安時代の琵琶譜から復元された曲や敦煌の莫高窟から発掘された漢文付きの敦煌琵琶譜の曲、平調越天楽、琵琶で詠む般若心経、現代の中国琵琶の音色を、山下先生のご説明を交えながら鑑賞しました。

休憩時間には山下先生のご厚意により、この日お使いになっていた薩摩琵琶を壇上にて間近で拝見させていただきました。休憩前に説明された薩摩琵琶の特徴を一目見ようと、琵琶の周りには聴講者によるたくさんの人だかりができ、山下先生はお休み中にも拘わらず懇切丁寧に琵琶の説明をしてくださいました。このときの琵琶は、当日雨の心配があったため、湿気を吸ってしまわないよう漆の施された琵琶でした。

休憩時間が終わり、二曲目『先帝入水』を、平家物語巻第一「祇園精舎」の冒頭の部分を

加えた上で御演奏いただきました。『先帝入水』は平家物語では「先帝身投げ」として知られている話で、源平合戦の終盤、平清盛の妻時子（二位殿）が帝を抱き海へ投身する場面を語ったものです。この曲は、山下先生による先帝入水のご説明もあり、薩摩琵琶特有の奏法、調弦のタイミング、曲の内容など『実盛』とはまた違った角度から鑑賞する事ができました。

最後に、山下先生と聴講者との間で質疑応答が行われ、現代の薩摩琵琶の製作状況や琵琶の演奏技法、調弦、装飾、平曲の伝承状況や、正倉院に収納されている「螺鈿紫檀五弦琵琶」に対する質問など、多種多様な質問が飛び交い充実した質疑応答となりました。

私たちが日常、間近で鑑賞したり触れたりする機会の少ない無形の芸術＝琵琶の奏でる音と唱の時間は、とても貴重で充実した時間となったことと思います。また本講演会は、今までにない程多くの学外聴講者の方々に御来場いただきました。この点に於いても、今回の春季講演会は今まで以上に素晴らしいものになったようです。今後も学内聴講者だけに留まらず、広く学外の方々にお越しいただけるような充実した講演会が開催できるよう心掛けて参りたいと思います。

以上をもちまして平成17年度文化財学会春季講演会の報告とさせていただきます。



## 〈秋季大会〉

## 「仏教文化財をめぐる諸問題」

報告 3年 田中 美翔

平成17年度文化財学会秋季シンポジウムは「仏教文化財をめぐる諸問題」と題され、11月12日土曜日に開催されました。

関連報告として、はじめに明古堂主宰である明珍昭二先生より「彫刻・保存修理の現状」という論題で発表していただきました。最初に、保存修理についての概要を現在の保存修理の礎を築いた岡倉天心の話を変えながら説明され、その後、明珍先生が実際に手がけた修理の例をスライドを用いて紹介していただきました。焼損の例として寛永寺の天海上人坐像を、後世修理の悪い例として石堂寺の千手観音坐像を挙げ、その修理の過程や苦労など、現場でしか分からない修理の現状をお話されました。

次に、本学非常勤講師である宗臺秀明先生に「出土品に見る鎌倉人の信仰」という論題で発表していただきました。宗臺先生は鎌倉の出土品の中でも、特に寺院以外から発掘された遺物に焦点を当て、一般の人々の仏教信仰はどのようなものであったかについて考察されました。その中で、都市に集まった人々の中に、現世利益的な観音信仰と地藏信仰が広がりを見せ、多様な階層にまで広がっていたことを述べられました。ただし、遺物の材質とその依存率の問題や、呪符・魔除けの札が街中や寺院内から出土している点で、仏像の分布という一面のみではなく、多様な面からのアプローチが必要であると指摘されました。

続いて、本学大学院博士前期課程2年の蓮池美緒さんから「像内納入品について」と題して発表がありました。蓮池さんは、像内納入品の顕著な例である清涼寺釈迦如来像について考察されました。まず、像内納入品の特徴として五臓六腑の納入を挙げられました。また、清涼寺式釈迦如来像の模刻と納入品との関係について考察され、清涼寺釈迦如来像の伝来から模刻が盛んになるまで時間があり、五臓の納入が見られない像もあることから、模刻の流行と納入品の流行の直接的関係は不明であると述べられました。今後の課題としては、像に生身性を求める方法について東アジアと日本の違いを検討していきたいと述べられました。

最後に、本学教授の大三輪龍彦先生が「密教法

具について」と題して発表されました。先生は実際に密教法具を壇上に用意され、それぞれの用途や由来、一面器についてはその並べ方を説明されました。降臨壇場（仏に降りてきてもらう）にはその並べ方が指定されており、招く仏によりその配置は変化すると話されました。また、密教法具の伝来時期については平安末に唐に渡った8人の僧によりもたらされたという記録があり、そう考えるのが妥当であると述べられました。

そしてシンポジウムの締めくくりとして、パネルディスカッションが行われました。本学教授の河野先生を司会に、発表された先生方を交え、講演では触れることのできなかったことの補足説明や、会場からの質問に答えていただきました。

最後に河野先生より、「文化財の勉強をする上で注意することは何ですか」と明珍先生へ質問されたところ、「仏の前では頭を下げること」つまり、仏に礼儀をつくすことが大事であると話されました。このことは文化財を学ぶ私たちにとって非常に重要なことで、大変印象に残るお言葉でした。

このような活発な議論が交わされ、秋季シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。



## 学会 左見右見

### この一年間を振り返って

1年 冨塚 承未

この一年間を振り返って思うことは、高校時代よりずっと時の流れを早く感じるということだ。試験に合格し、春休みが過ぎ、いざ入学式。「無事に大学生生活をやっていけるかなあ?」という不安と戦っていた四月。そんな不安と戦っていると、さらにほかの不安も襲ってきた。授業の履修などは今までの学生生活と勝手が違うし、勉強も数段難しくなった。最初は、「さっさと辞めたい・・・」と常に後ろ向きなことを考えて暮らしていた。

「歴史」が好きで、大学で本格的に勉強しようと思っていたのだが、一年目はそれとは全く関係の無い授業ばかり。その上、困難なレポートや課題。顔と名前の一致しない同期生多数。常に戸惑い、イライラしていた。

しかし、人間というものとは時とともに環境に順応できるものだと、自分自身、身を持って感じた。最初は、「憂鬱・陰鬱・灰色」の三拍子揃った大学生活も、実習や授業で文化財学科の人たちと交流を深めるにつれ、だんだんと楽しくなった。「心の余裕ができた」とでも言えるのだろうか。そのせいか入学当初とは違い、何に対しても「暗く考えるくらいなら、楽しもう」という姿勢ができた。そのように考えられるようになってからは、色々なことが楽しくなった気がする。

今となっては、この一年が本当に短く感じる。それだけ中身が充実していたのだろう。来年度も、この調子で大学生活を送っていこうと思う。

### 文化財学科の学生として今年一年を振り返る

2年 軽部 和也

私が文化財学科に入学してからの最初の1年間は、まさに手探りのような状態だった。とりあえず自分のやるべき最低限のことだけはやろうと心に決め、大学生活を送っていた。そんな私は2年になって、一つ目標を立てた。「学校にも慣れてきたから、積極的に動こう」と。2年になり、同じ部活内に運良く「美術工芸部会」、またの名を「鶴鳴会」に所属している先輩が居ることを知った。私は、美術系の分野を学んでいきたいと思っていたので、その先輩に話をして友達と2年から入会することになった。初めて参加した「鶴鳴会」で、金沢文庫の方へ巡検に行った。知っているのは部活で一緒の先輩だけで、他の先輩方はもちろん知

らない人ばかりであった。女性が多かったが、気さくな方ばかりで部会にも溶け込みやすかった。巡検が終わった後、八景島に遊びに行った。部会というものに硬いイメージがあったのだが、そんなイメージはすでに無くなっていた。

夏頃の活動では、東京へ浮世絵を見に行き、その後「江戸切子」の体験をした。美術工芸部会というだけに、やはりこのような作業はとても楽しかった。オリジナルのコップを作り、持ち帰ることができた。私はそれを家に飾っている。

冬頃に行ったのは根津美術館だ。このときの参加者はとても少なく寂しかったが、初めて根津美術館に行けたので満足だった。

文化財学科としての1年間を振り返り、私が部会に入るととても得したと思った事は、ゼミ選ぴである。自分の部会の中に大学院生の先輩がいて仲良くなれたり、自分が学びたい分野のゼミに入っている先輩がいたりしたのでたくさん話すことができ、講演会後の懇親会にも参加しやすくなった。このように今年度は部会に入り充実した1年が過ごせたと思う。大学生活を楽しむには、色々な団体に参加して様々な経験をしなければいけないものだと思うされた。そんな1年間だった。



### ゼミ愛

3年 田名網 亮

正直、ゼミが始まってからようやく大学生なんだという実感が湧いてきた気がします。

ゼミに入り実際に授業を受けてみて、こんなに和やかな雰囲気でのいいのだろうかというのが第一印象でした。それまでのゼミのイメージは、ピリピリした雰囲気で行うものかと思っていましたが、全くそのようなことはなく、ゼミの仲間と仲良く、とても有意義な時間を過ごしています。

岩橋ゼミでは、最初の授業として美術品の取り扱いを勉強しました。掛け軸の掛け方や収納方法、茶碗の持ち方や箱紐の結び方、巻物の巻き方など、今まで自分が経験したことのない作業を学ぶこと

ができ、本当に良かったと思います。自分は不器用なので、四苦八苦しましたが、先生や先輩のおかげで少しは上達することができました。

現在は、自分が好きなものについてのキャプションを製作しています。将来文化財になりうるものなら何でもいいということで、本当に自由にやらせてもらっています。自分で書いた文章を先生に読んでもらい、アドバイスをいただき、また書き直してくるという作業の繰り返しですが、これが本当に楽しくて仕方がありません。先生と共に、ほぼ毎週先輩と一緒に授業に参加していただき、アドバイスをいろいろといただけるので本当に助かっています。完成品は6号館に掲示されているので、是非ご覧下さい。

このすばらしいゼミに入れたことを、心の底からうれしく思います。まだ一年あるのでこのまま自分を貫き通していきたいと思っています。

## 文化財学科の学生として

4年 野崎 美帆

「2年次に考古実習があるから」これが鶴大文化財学科を選んだ理由でした。それから4年が経とうとしている今、この学科の学生でいられたことをとても嬉しく思います。1年次は講義や実習・課題に追われていた毎日でしたが、2年次の春休みからは鎌倉で発掘調査に参加させて頂き、それまでの生活よりさらに充実したものとなりました。埼玉から鎌倉までの2時間半も苦にならず、全てが新鮮で勉強の日々でした。自分の好きな事に専念できた私は、とても幸せ者だと思います。

文化財学科に在籍している学部生の皆さんへ、言いたいことがあります。鶴大文化財学科は文献史学・考古学・美術工芸・保存科学など、複数の分野を学ぶことができる非常に恵まれた学科です。ただ何となく4年間を過ごすのではなく、目的意識を持って講義や実習に取り組んで下さい。また、年2回行われる文化財学会や部会活動に進んで参加し、先生方をはじめ先輩や後輩と交流を持ってほしいです。同学年の友人との繋がりも大事ですが、それだけでは得ることができない知識や情報によって、今までとは違ったものの見方ができると思います。皆さんは、これからの文化財学科を担っていく方たちです。ぜひ、積極的に行動して下さい。

最後になりましたが、いつも熱心にご指導して下さいました先生方、助手さん、先輩方、後輩、4年間一緒に文化財学を学んだ友人達、そして温かく見守ってくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。



## 伝えたいこと

3年 高橋 苑子

大学生生活を振り返ってみて、私にとって「文化財学会委員歴3年」ということは、大いに自慢できることです。皆さんは、学会委員の活動をご存知ですか。私たち学会委員は、春の総会・講演会、秋のシンポジウムの運営、この学会報の製作などの活動を主に行っています。活動のほとんどは、準備で費やしているといっても過言ではありません。長期休暇やテスト期間中さえ、集まって話し合いをして頑張っています。なぜ、私たち学会委員がこのような頑張っているのかといいますと、それは、文化財学会を今より発展させていこうという強い信念が、委員一人一人にあるからです。

今回、この場をお借りして皆さんに伝えたいことがあります。それは、「学会を発展させていくには、皆さんの協力なくては成し遂げることができない」ということです。私たちは日々の活動を通して、皆さんにより学会に参加していただけるよう、今以上に努めていきたいと思っていますので、是非会員である皆さんも、学会に興味をもって参加してください。一緒に文化財学会を創っていきましょう。よろしくお祈りします。

今年一年を振り返ると、学会委員長という大変責任ある仕事をやらせていただけたことで、より多くのことに関わることができました。数多くの貴重な体験ができたのと同時に、授業だけでは到底作ることのできない幅広い人脈を作ることでもでき、充実した一年だったと思います。最後になりましたが、このように思えるのも、ふがいない私を支えてくれた学会委員・先生方のおかげです。本当にありがとうございました。

## これからの学会

4年 柳田 修次

4年生になり、学会とも関係が薄くなっていきました。3年生の学会委員もその下の学年も、院生方の力を借りてしっかり行っていました。自分があまりにもふがいなかった分、今の後輩はしっかり行えているので、それを見てホッとしました。今の後輩ならこれからの学会を盛り上げてくれるでしょう。

学会委員というのは自分の時間が削られるだけではなく、自宅に帰る時間が遅くなるのはあたりまえで、入った当初は正直何のために動いているのかわかりませんでした。ですが、先輩方と行動をするうちに、少しずつその意味や内容を理解していきました。しかし、学会活動は意外に地味で、一般の学生は、知っている人のほうが少ないと思います。どの様なことを行っているか、知らない人もいるのではないのでしょうか。

これから、学会は対外的にも大きくなるべきだと思うし、学科内でもその存在を大きくして行くべきです。学生がその活動を知ると同時に、学生がより良い文化財学科生活を送るために努力していくべきだと考えます。

文化財学科という学科は、全国的にも珍しい学科です。文化財保存科学を学べ、日本古来の漆の知識を得ることもでき、専門的な研究も数多くできます。また大学の図書館は全国でも有数の図書館です。

ですが、最終的には学生が学ぼうとする意志が大事です。4年間は長いようで短いです。僅かな時間でやりたいことをやるには、学ぶ意志が重要です。文化財学科の特徴を、また学生が学ぶ意志を伸ばしていくためにも、学会は今ままで落ち着くことはなく、学生のためによりよい活動をしていくべきだと思います。学生も学会や研究部会に積極的に参加して、より多くのことを学んでいくべきだと思います。

## この一年を振り返って

修士1年 沢辺 真理子

昨年三月に無事大学卒業を果たし、四月から大学院へと進学した。心から嬉しかった。大学は学校教育法において、「学術研究機関であり教育の最高機関」とあり、大学院は大学卒業者がさらに深い研究を行うための機関である」と記されている。自分の卒業論文をさらに発展させたいと思うとともに、なにより「学びたい」という気持ちが心に溢れていた。大学院への進学はそれを満たす大きな一歩であると確信していた。そのため入学式には、期待に胸躍らせ、踊りだしたい気持ちを抑えて臨んだ。

しかし、授業が始まると学部時代のように甘くはなかった。授業前の下準備のために図書館に通い詰め、必要な文献は先生の助言から探し出し、蔵書に無ければ他大学の図書館に足を延ばすという具合だ。文献は必要な枚数コピーをするのだが、学部時代の比ではない。お陰でコピーのスピードにかけてはOL並みの手際だ。このように過ごす日々は想像以上に忙しいものであった。だが、それも次第に生活のリズムに溶け込んで、今では楽しいものになった。「調べる」ということで、それなりに知識を得るのだが、それは同時に次への興味をかきたてる要因にもなる。これもまた楽しいことであるが、それをどう整理しまとめるかが大きな問題となる。また大学院に入り、自分の意見を納得のいくように、どう表現し書き表せるかということが、大変難しいことだと改めて実感した。知りたいことに貪欲に取り組むことはいいことだが、それを伝えるという作業は、それなりの手順を踏むことが大切である。

このように過ごしていると、本当に一年は短い。毎日同じことの繰り返しではあるが、それを積み上げていくことが大事なことであると感じる。自分を最長させるには満点の一年であった。「決断即実行」がこの一年で得た教訓である。残り一年いい結果を出せるように頑張りたい。そのためにもこの一年で得たものは大事にしなければならない。



## 各学年の実習の感想

### 実習の感想

1年 渋谷 留梨

大学に入学して、実習ではどんな事をするのかすごく気になっていた。前期では巡検、後期では土器を修復して遺跡発掘調査報告書を作成した。

前期の実習は「巡検」という事で、總持寺を最初に見て周り、鎌倉・横浜・上野浅草と、毎月1・2回行われた。最初の巡検後、レポートの指導を受け、書き方を教わった。この巡検には一泊研修旅行があり、長野に行ったが、この旅行は、友人が作れて、先生方とも交流できた。文化財を見て、触れ、さらに博物館の中の保存・修復をしている部屋を見学した。将来、自分はどういう職業に就けるのか、とてもわくわくしながら見て回った。鎌倉の巡検では、研究されている先生方が、歩いている時もずっと解説してくださった。毎回、レポートをまとめるのに追われていた気もするが、博物館の展示方法や、巡検で興味を持って調べた事は、これからの勉強に繋げ、役に立てていこうと思う。

後期は、巡検と違い頭と手を使っての作業で二時限連続の授業だった。接合などの細かい作業で、壊してある土器をパズルのように組み合わせて接着剤で復元していく。少しずれると、歪んで隙間ができてしまい、一度壊れると再び復元するのが難しいと感じた。次に土器を測って文様をトレースしたが、目が疲れる作業だった。土器を上からでも下からでもなく、真正面から見るのが難しく、授業中に終わらせる事ができなかった。トレースをした後は、採拓作業をした。半紙を湿らせて土器に押しつけ、墨打ちをする。濃すぎず薄すぎず、均等に墨打ちをするのは、技術と経験が必要だと思う。土器の他にも、古銭や外国のコイン、ハンコの様なものや鏡なども行った。その後、完

成した土器を撮影した。インスタントカメラとは違い、撮影するのに手間のかかるもので、普段使う事のないカメラは真新しく感じ、面白かった。先生のアドバイスもあって上手く撮れたと思う。最後に報告書の編集作業をした。トレースしたもののや文章のレイアウトなどを行い、文章の校正は、二回見直しをしたが、修正できていないところがあった。たった1ページを作るのにこれだけの長い時間と労力があるのだと思うと、本を一冊作るのにどれだけの労力があるのだろうかと思う。

一年間の実習を通して、自分に向いている作業が少し見えてきた。来年は、今年とはまた違った専門分野を勉強するが、習った事を忘れずに繋げていきたい。

### 2年次の実習で得た事

2年 戸畑 かおる

2年次の実習では古文書の修復を行いました。この実習は、古文書の取り扱いの心得から実践的な修復、また古文書の読み方など多くの作業をし、最終的に修理調書として提出します。

古文書修復方法には、「裏打ち」と「繕い」というやり方があります。「裏打ち」は、本の形に綴じてあるものを解体し、寸法やどういった欠損があるか等を調べ修理調書に記入します。そして、写真を撮り、それから古文書自体の修復作業に入ります。「裏打ち」における難しい作業は、古文書に水を含ませ刷毛で皺を伸ばす作業でした。水分が少なすぎても、多すぎてもいけなく、また力加減が難しいものでした。

「繕い」においては、虫損を和紙で塞ぐという作業を行いました。虫損した穴に合わせ切り取った和紙の糊づけを行うのですが、途中和紙の「毛羽出し」という作業がなかなか上手くいかなく、穴の形に合わなかったりしました。しかし、同じ作業を繰り返す行うので、「裏打ち」に比べこちらは早く慣れ、どんどん虫損の穴が塞がっていく様子には達成感を感じました。作業工程が多くあるので、はじめは忘れてしまったりしましたが、先生や助手さんに教えてもらい、実際に修復し終わった物をみると反省点もありますが、貴重な体験ができ満足な気分です。

また、実際に古文書を読み「なぜ、この古文書の中の家族は女だけなのか」など、古文書の内容について自分なりに考えることも行いました。興味が引かれる内容だったので、おもしろく古文書が読めたと思います。古文書はどう有るべきかを学び、古文書に触れられる今回の実習は貴重なものであり、有意義なものでした。





## 福島・会津を旅して・・・

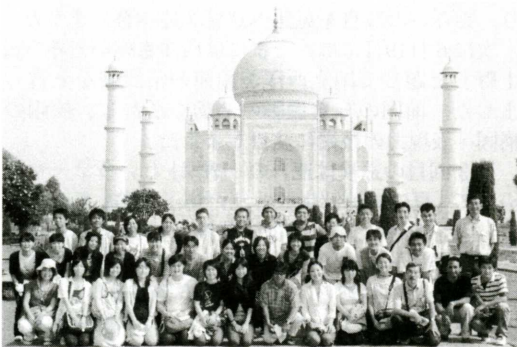
3年 石塚 菜津美

今回の実習旅行は、福島のカ文化財に触れる旅であった。天気予報では、1日目が雨予報ということだったが、3日間とも、好天に恵まれた。今年には会津ディステーションということで、駅などあちこちで沢山の広告が貼り出されていたが、その中で訪れてみたいと思っていたのは、さざえ堂と大内宿であった。会津には、何回か訪れたことがあったが、詳しく文化財などに触れる機会がなかったので、今回はよい機会だった。

会津さざえ堂は、福島県会津若松市の飯盛山に1796年に建立された、高さ16.5メートル、六角三層のお堂である。その独特な二重らせんのスロープに沿って西国三十三観音像が安置され、参拝者はこのお堂にお参りするだけで三十三観音参りができるというお堂である。また、上りと下りが別の通り道になっている一方通行の構造により、たくさんの参拝者がすれ違うこと無く、安全に参拝できるという珍しい建築様式を採用したことで、平成7年に重要文化財に指定された。

大内宿は、江戸時代の宿場の面影を今もそのままに残した貴重な村で、街道は会津西街道、または南山通りと呼ばれ、会津若松と日光今市を結ぶ重要な道である。大内宿は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

今回の研修旅行では、博物館施設の福島文化財センター「まほろん」も訪れた。「まほろん」は、福島県内の文化財・発掘したものすべてが保存されている場所である。収蔵資料数は42727箱で、あと20年は持つと聞いた。これらは、温度・湿度の設定はなく保存されている。一方、写真フィルム関係は、密閉されて温度27℃以下、湿度60%以下に設定されている。火災に備え、消火栓6ヶ所、地震の為に柵に紐がついていた。「まほろん」は市民に文化財に身近に親しんでもらう施設で、生涯学習など体験学習には丁度よい。しかしアクセス



の悪さというデメリットもあった。施設内は広く野外でも活動できる。

今回福島のカ文化財を見学して、福島には沢山の文化財があり、歴史があることを改めて知った。最初に研修旅行が福島と聞いたとき、前年度と同様、京都・奈良がよかったと思ったが、それは福島よりも京都・奈良の方が文化財もたくさんあり、また文化財と共存している町だと思ったからだ。しかし、実際に福島を訪れて考え方が変わった。一ヶ所に多く文化財はないが、いかに地域の人に文化財を知ってもらい一つの文化財を大切に保存していくことが、重要であるかが示されていたからである。そのようなことを改めて考えた旅行であった。

## 実習Ⅳを振り返って

4年 笹村 剛

今年の実習Ⅳは、国外組はインド、国内組は五島・対馬・壱岐という長崎県の島嶼部から、佐賀・福岡・大宰府といった九州本土へとかなり広い範囲へ足をのばすこととなった。

今回の実習では、九州という土地柄からくるキリスト教に関係するもの、そして日本の周縁部であり、対外関係の最前線としての歴史をうかがうことのできる文化財が、見学の中心を占めていた。

五島では、巡ったどの教会でもキリシタン弾圧の歴史が語られた。信仰が認められ建設された教会の数々は、江戸時代を通じて迫害の中でも信仰を守り続けた人々の記憶の一端に触れるものであった。また五島市の市内に残っている明人堂や六角井戸、対馬の博物館で見た朝鮮通信使の様子を描いた絵巻などは、今もこの島々に残る海外との関係の有様を伝えている。関東に住んでいては、こうした対外関係を知ることのできる文化財は目にする機会は無く貴重な体験であった。さらに対馬や壱岐に残る元寇の戦跡や、秀吉の朝鮮出兵のための城郭の跡は、この島々が外国と向き合う国境であることも改めて認識させられた。

見学した文化財のほかにも、バスガイドの方も多くの興味深い話を聞かせてくれた。仏教徒とキリスト教徒の墓の違いや、産屋や海草を貯蔵するための小屋、さらに山で行われている養蜂業についてなど、地元の方だからこそ知る話であり、非常に有意義な実習であった。また島の美しい緑や、はらかな大陸へとつながる海を抱く島嶼部の雄大な自然も、この実習に色を添えてくれた。

ただ今回の実習で学んだことのなかで、もう一つ重要なことは、いくら刺身がおいしくても、毎日食べさせられるとさすがに飽きるということだ。

## 研究部会報告

### 研究部会連合

研究部会連合の活動としては、研究部会の発展や部会同士の連携を深めるため、そして皆さんにもっと部会活動について知ってもらうために、各研究部会の代表が月1回程度会合を開いて話し合いを行っています。また今年も昨年に引き続き、連合誌『財の穴』を発行しました。これは、研究部会がどういった活動をしているのか知ってもらうために、活動内容を簡単にまとめた広報誌です。

今年の夏季には、各部会同じテーマで巡検を行う合同企画を開催しました。第1回目は「納涼」と題し、江戸東京研究部会は『東海道四谷怪談を巡る』、古典芸能研究部会は『江戸川花火大会』、美術工芸研究部会は『夏の浮世絵と江戸切子体験』の巡検を行いました。12月には各研究部会の年間活動報告会として「第3回 研究部会活動報告会」を行い、研究部会の活動成果を発表しました。

残念ながら現在、各研究部会ともに部会員数が伸び悩み、このままでは今後の維持が心配される部会も出てくるという状況です。学部生の皆さんのご協力がなければ、これから先部会活動を続けていくことは困難です。特に1、2年生の部員数が少なく課題となっています。研究部会には1回来たら必ず入会しなければいけないというような入会の義務はありません。各部会とも巡検などの活動を行う際には随時6号館のホワイトボードに告知をしていきますので、興味ある活動がありましたらお気軽にご参加ください。

今後の予定としては、『財の穴』第3号の発行、これまでの活動報告を載せた自由閲覧用のファイルの設置、研究部会全体の合同企画などを考えています。また各部会、来年度に向けて、皆さんが興味を持てるような活動ができるよう準備中ですので、是非ご期待ください。

### 江戸東京研究部会

「江戸東京研究部会」は江戸東京に関する地を歩き、現地の歴史を知るということをモットーに、巡検を主とした活動を展開してきました。2005年度も年間を通してのテーマは設けず、毎回様々な観点から巡検を行いました。

今年最初となった活動は、5月22日に行われた『江戸の水運』と題した第20回目巡検です。江戸時代に河川流通路の要所となった木場から深川、浅草にかけてを、河川の今昔の姿や深川の構造に重点を置いて歩きました。7月2日には、第21回『江戸の外国公使館跡を巡る』と題し、三田から品川近辺に点在する、開港後に外国公使館が置かれ

た寺とそれに関する史跡を巡りました。当日、港区郷土資料館で行われていた「江戸の外国公使館展」の見学も兼ねていたので、実際に展示で紹介されている史跡を見学することができました。7月24日には、各研究部会合同で行われた「納涼」企画の一環として第22回巡検『東海道四谷怪談を巡る』を行いました。四谷にある、お岩のモデルとなった田宮岩が祭られている於岩稲荷神社を始めとし、深川近辺の作品とゆかりのある史跡を巡りました。途中、「東海道四谷怪談」のあらすじを交えての巡検となりました。今年度最後の巡検として12月3日第23回『隅田川江戸名所通覧』と題して、浮世絵のテーマとなった隅田川や橋の様子を、当時の浮世絵と変わらない景色から全く面影を残していない景色まで、実際に浮世絵や地図と照らし合わせながら見学しました。

江戸東京研究部会は、皆さまのご支援のおかげで今年創設5周年を迎えることができました。これからも巡検活動の充実に努めていきたいと思っていますので、変わらぬご支援のほど、よろしくお願いいたします。



### 美術工芸研究部会（鶴鳴会）

「美術工芸研究部会（鶴鳴会）」の2005年度の活動について報告します。最初の活動は、4月24日に「金沢八景写真真撮影巡り」を企画して金沢八景方面へ行き、琵琶島神社、瀬戸神社、龍華寺、称名寺を歩きながら、個々の目線、感性で写真を撮りました。撮った写真は後日に行った反省会で持ち寄り、お互いの写真を見比べ意見を述べ合いました。

次に6月19日には「たまには西洋もいいだろうin上野」と題して国立西洋美術館の常設展を鑑賞しました。前回の写真撮影の活動を活かし、絵画の構図・表現力の技術に注目しました。

第3回目の巡検は連合の「納涼」というテーマに沿って「夏の納涼浮世絵と江戸切子体験」を企画しました。まず、礪川浮世絵美術へ行き、「《美人・妖怪・怪異》夏の納涼の浮世絵展」を鑑賞後、すみだ江戸切子館へ移動して江戸切子の体験をしました。体験はグラスやタンブラーで行い、一人30分から1

時間ぐらいで出来上がりました。体験中はとても暑かったですが、出来上がったものはとても涼しげなものとなり、有意義な体験となりました。

12月11日には、根津美術館の企画展で筑前高取焼を鑑賞しました。焼物の奥深さを知ることができた企画でした。

以上が2005年度の活動報告となります。2006年度の活動予定はまだ詳しく決まっていますが、鑑賞だけでなく美術工芸品の取り扱いや体験、制作をやっていこうと考えています。また、本年度は新入部員の獲得のためにも魅力ある企画を考え、魅力ある部会にしていきます。

### 歴史考古学研究部会

「歴史考古学研究部会」は、前年度、今までは主に鎌倉を拠点に活動していたのですが、その地域に固執するとこなく、本部会の基本理念である関東全域に目を向けた活動がすこしではあるが、達成できたと思う。さらに今年ももっとよりよく達成できるように努力してみた。まず、第1回現地巡検を5月22日に『切り通しツアー 中世鎌倉西方の防衛線 極楽寺・大仏坂を中心に』と題して、大仏坂の切り通し・御霊神社・星月の井戸・極楽寺の切り通し・伝上杉憲方墓塔・極楽寺まで歩きました。この回の主旨としては、実際に鎌倉における西方の防衛線について歩くことにより概観して改めて再確認しました。尚、この巡検に際しては、いつもなら事前に説明会を開くのですが時間があまりなく開くことができませんでした。

8月10日には第2回現地巡検としまして『納涼ツアー 歴考研・鎌倉合同巡検 葦山にいこう！』と題して今回は、今までいったことのない葦山までいくことにしました。葦山駅に集合し郷土資料館を見学して北条氏邸・伝堀越御所・願成就院をみました。大学から離れた所でもあり、学生の人たちがめったにいくことがない場所のため、参加者にとっては新鮮に感じたのではないのでしょうか。

今後の活動としては、活動範囲を徐々に広げ、各地の歴史的な様相を捉えていければ良いと考えています。2月には毎年恒例の『鎌倉やぐらツアー』がおこなわれます。少しでも活動に興味を持たれた方は、どうぞ気楽に歴史考古学研究部会の門を叩いてみてください。

### 古典芸能研究部会

「古典芸能研究部会」では、7月16日と12月3日に講師として青柳先生をお呼びし、總持寺の紫雲台にて「装束の会」を行いました。夏季は「平安装束」について勉強し、十二単を始め、束帯、狩衣を着ました。冬季には「武家装束」をテーマに、鎧を着て、鎧の各部分の役割や、武器におい

ては太刀を始め、鉄砲についても勉強しました。夏季・冬季とも一度先生から装束の説明をうけ、着方を教えていただいた後、次に着る人からは、参加者全員で協力し、先生のアドバイスを受けながら着付けをしました。2回とも参加者が多く、とても有意義な活動となりました。

ほかにも、「武芸とその装束」をテーマとして、4月17日の鶴岡八幡宮での流鏑馬の見学、納涼企画では、「庶民の納涼の文化」として、江戸川花火大会への参加、8月17日には、青柳先生と上野雅楽会の参加する長唄のレコーディングの見学をしました。10月2日には、八千代市郷土博物館にて『上野雅楽会雅楽鑑賞会』に参加しました。笙・箏・箏・箏から一つ選んでの雅楽器体験のほか、青柳先生の長唄、上野雅楽会による「陵王」を鑑賞しました。次に、11月20日には、葛原岡神社で行われる「日野俊基御祭」に行き、「装束の会」の体験を活かして、伶人の方の狩衣の着付けのお手伝いをしました。

以上が今年度行ってきた活動です。来年度も、好評だった「装束の会」を、少し内容を変えて行おうと考えています。ほかにも、今年活動してきた内容をもとにして来年度の活動の計画を立てていこうと思います。



### 鎌倉研究部会

昨年度まで活動を休止していましたが、今年度より活動を再開することとなりました。

「鎌倉研究部会」は、部会のテーマでもある「鎌倉」を中心に巡検や勉強会を行ってきました。例えば、過去には石塔巡りや国宝の特別展を鑑賞したりしていました。また、『吾妻鏡』の講読を大学院生の方にご協力いただいて読み進めるといった活動をしていました。

来年度は巡検を中心に、講読などの屋内活動も継続していきたいと考えています。ですので、鎌倉に興味のある人もない人も、ぜひ鎌倉研究部会に参加（特に1、2年生）してください。お待ちしております。

- 5 HP上での広報活動
  - 6 親睦その他の事業
  6. 本会に次の役員を置く
    - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
    - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
  7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
  8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。  
付2 平成16年4月1日 一部改正

#### 平成18年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季大会

日 時 6月3日（土）

総会（午後1時から）

講演会（午後2時半から）

会 場 鶴見大学会館メインホール

講 演 「甲冑と十二単の世界」(仮)

文化財学会秋季シンポジウム

日 時 11月18日（土）午後1時から(予定)

会 場 鶴見大学会館メインホール

テーマ 「漆と文化財」(仮)

### 鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
  - 1 研究等の発表
  - 2 講演会の開催
  - 3 会誌・会報等の編集刊行
  - 4 研究部会活動

### 編集後記

入学して最初のこの一年は、とても短かったように感じます。委員として参加した春と秋の学会は、緊張しつつも、やり甲斐のある楽しいものでした。その中で、先輩方に迷惑をかけただろうし、幾度か失敗もしたと思います。それでも、貴重な経験になりました。

文化財学科の学生でも学会についてはあまり知らないようで、何をしているのか聞かれることがあります。そんな時は具体的に例をあげるよりも、会報を読んでいただくのが一番だと思います。実習の感想を取ってみても、自分と重ねてみたり、来年の実習を知ることができたりと、興味を持っていただけたと思います。

来年は、新入生に学会についてよく知ってもらい、また、私たちがこの一年で得たこと、学んだことを伝えたいと思います。

(編集委員)